

陳 述 録 取 書

2005年7月31日、当職はインドネシア共和国プカンバルにて以下の者より井上千寿代を通訳として録取したので報告する。

氏 名	アリ・アムラン (Ali Amran)
K . T . P .	1.2114.2004.02.02.01
原告番号	c . 9 1
性 別	男
生年月日	1957年12月31日 (48歳)
所属する村	タンジュン・アライ (Tanjung Alai)
氏 族	マンダヒリン (Mandahiling) 族
宗 教	イスラム
学 歴	S M P (中 学 校) 卒 業
職 業	農業
家族構成	妻(1964年生、36歳)、長男(22歳)、長女(18歳)、次男(15歳)

2005年7月31日

1. 移転前の生活状況

1) 私は KTP (身分証明書) によると 1957年5月12日に生まれました。実際の生まれた年は正確には分かりません。私は 1980年に結婚し、現在は妻(1969年生まれ、36歳)、長男(1981年6月30日生まれ、24歳)、長女(1983年6月6日生まれ、22歳)、次男(1984年6月6日生まれ、21歳)、の5人家族です。結婚後、私は妻の実家に入り、現在は妻の母親も含めて6人家族です。

私たちが結婚後に住んだ住宅は、6×6メートルの大きさで、セミパーマネントの家でした。セミパーマネントというのは下から上まで全部ブロックですが、屋根だけが木というものです。私の家では主な収入源が農業で、時々漁業を営んでおりました。旧村で生活していた頃は米、トウガラシ、ココナツ、野菜、などの生活に必要なものの必需品は、そのほとんどが自給できました。私の家でも川で捕ってきた魚のうちまず自分たち家族で食べ、さらに余った分を、売買して現金収入としていました。

私の住居は、カンバル川からは2キロメートルほども離れていましたが、飲料・調理用水は、カンバル川にまで出掛けて行って取水していました。また、水浴び、洗濯、排泄なども、この川で行っていました。

2) 農業

私の家にはゴム園が2haほどありました。収穫は1日10kgぐらいあり、それはだいたい、当時の水準では2万ルピアの収入になりました。月にしますとだいたい60万ルピアありました。物価は今とは違いますから60万ルピアというと当時はよい収入でした。ゴム園は私1人で手入れしていました。

家の周りには、0.25haぐらいの畑があり、そこには、私はトウガラシを中心に植えていました。野菜類も植えていました。ココナツ、ドリアン、ランブータン、コーヒーなどの果樹が植えていたほか、4株の竹林がありました。竹は時々売れます。畑からの収穫量は月に15万ルピアの収入になりました。当時、15万ルピアの収入があればそれは十分な収入でした。

このほかにも0.25haぐらいのみかん園を持っており、そこには、40本のミカン樹が植えられていた。ミカンは時期によって変動がありますが、収穫期には200kgぐらいとれ、30万ルピアぐらいの利益があったと思います。タンジュン・アライは土地もよかったです。みかんが良くできたのです。

水田はありませんでした。

水牛は4頭ぐらい飼っていました。これは村では多い方です。水牛を飼うための放牧地は村にはありました。誰の土地という訳ではありません。ニワトリなども放し飼いで飼っていました。

自分の土地を使って陸稲(gogo)を植えていました。だいたい1haから1.5haぐらいだったと思います。陸稲はだいたい1回の収穫で400kgがあり、それが年2回収穫できました。収穫した米は全て、家で消費していました。私は家族のために米を買ったことはありません。陸稲は近隣の村人とともに、いっしょになって栽培しました。村ではこれを「アンピル・アリ」(共同する)と呼んでいました。これは「ゴトン・ロヨン」とは少し異なります。

3) 漁業

私はカンパル川まで行って漁をしていました。魚を捕っていたのは雨期(9月から12月ごろ)になります。というのは雨期にはゴム園の仕事ができなくなるので、その時期に魚を捕りました。漁法としては、もっぱら投網を用いる方法でした。主な漁獲魚は、シカム、レラン、カピエ、バウン、マリ(mali)です。漁獲魚は、一部を家庭で食べましたが、余れば市場に回しました。私の家庭ではこの販売収益が、だいたい1日2kgぐらいで、6000ルピアの収入になりました。

4) 出稼ぎ

出稼ぎに出たことはありません。村で十分な生活ができました。

5) タナウラヤット

森の特別管理する必要はありませんでした。好きな分だけ各自が開くことができました。私自身も土地を開墾してはゴム園などにしていました。

6) 地域のつながりについて

旧村は、伝統的なミナンカバウ社会そのものでした。そこには、伝統的なやりかたで共同の財産を大切にしてきました。旧村ではルマ・ガダンがミナンカバウの伝統的な様式で作られており、そこでは1年に1度、伝統的な行事を村をあげて行っていました。「パンジャク・ピナン」という行事があり、木登り競争がありました。木には油が塗ってあり、勇気と力がある者しか参加することができませんでした。「ブンチャク・シラット」という行事があり、武道大会がありました。「デキル・バナ」という踊りながら太鼓をたたき、男性のたくましさを表す行事がありました。これらは祖先を思い出しながら行う行事で、大切なお祭りでした。これらの行事は現在でも続いています。新村でもルマ・ガダンはあるのですが、ミナンカバウの伝統的な様式ではありません。これはお金が足りないためです。ルマ・ガダンは私のスクのニニック・ママックの形式的には所有になっていたのでも補償されました。もちろん不十分なものでルマ・ガダンを元通りのミナンカバウ様式にはできませんでした。

かつてはカンパル川がありましたから、ラマダンの前に河川で身体を清める行事、「バリマウ」がありました。このときには舟が競争します。私たちは今でもカンパル川まで行ってやっています。

2. 移転の経緯

1) バンキナン会議まで

1970年代からダムのごことは聞いていましたが、政府からちゃんと説明があったわけではありません。

いつだったか、大学のダムに関する現地調査がありました。そのほかにもいろいろ調査があったことは知っていますが正確には分かりません。

1980年代の初め頃に政府からダムができるというようなことの説明がありました。

1981年ころ、政府や、軍のコラミールが私たちをトウガラシの栽培場につれていきました。このときに栽培の方法を教えました。これはダムができるので移転するので、移転先で作物が栽培できるための指導でした。このころからダムのごことが政府からささやかれるようになりました。

1983年12月19日にニニック・ママックがバツウ・プスラット村のプサントレン（イスラム学校）において会合を開いていました。私は行くことはいったのですが、招待状を受けていなかったのでも、聞いているだけでした。このときには知事の第一アシスタントがニニック・ママックに話していることを直接聞きました。彼はこの時に移転後は生活が良くなる、セミパーマネントの家を用意する、収穫可能なゴム園を用意するというようなことを行っていました。この会合にはコラミール（軍）もバピンサ（軍）も来ていました。

移転先が知らされる前に移転先をどこにするかという政府からの話し合いは全くありませんでした。1989年ころニニック・ママックから移転先を知らされました。タンジュン・アライはだいが離れた場所に移ると言うことでした。ニニック・ママックもちゃんと知らされていなかったようでわずかな時間で説明が終わりました。移転先がどういる

理由で決まったか正確には分かりません。移転先はもともとニニック・ママックの土地（タナウラヤット）であったため私たちが移らなければ、政府は私たちの土地を別の村に譲ってしまうことになるということでした。遠く不便な場所に移転するため、みなショックを受けたのですが、反対することはできませんでした。反対すれば、警察や、軍隊に逮捕されることになったでしょう。みんなそういうことを十分知っていました。反対した場合には口止め料をもらって金持ちになるか、殺されるかどちらかというような状態でした。みな、怖がっていました。

1990年ころに村では話し合いが行われ、新しい家はどうなるのか、ゴム園はどうなるか、いろいろなことが聞かれました。しかし、十分な情報は得られませんでした。

ちょっと日にちを覚えていませんが、ある会合では村長が移転のことで正確に説明できないことがありました。そのころにサレー・ジャシットが来て説明しに来たことがあります。場所はスラウスの拝礼場があって私たちはそこに集まりました。そこには村中の人々がきたので何百人だろうと思います。そこで、知事の第一アシスタントであるサレー・ジャシットはそのときに今より生活が良くなると説明しました。家は広いセミパーマメントを用意する、3年たったゴム園も支給し、移転したときは収穫できるようにしておくということでした。パラウィジャ（畑）が与えられるということでした。そのほかにも3年間食料が与えられるということでした。電気も引き込み料は無料で、3ヶ月は電気代も支払わなくても良いということでした。道路は主要にはアスファルトとし、畑に行く道は石で両側を固めると言うことでした。もちろん、これらは全て空手形でした。補償金については生活できる十分な大金が支払われるということでしたがうそでした。

1991年4月13～14日に開かれたバンキナン会合が行われたのですが、そのことは終わってから知らされました。このことは村人が噂し合っていたの私も知ることができたのです。私たちはバンキナン会議はダムに関連することであることはみな噂していました。このときに移転のこと、補償金のことを話したのだろうと噂さしあっていましたが、詳しいことは何一つ分かりませんでした。

このころだと思いますが、ダムのプロジェクトの人が村の幹部をジャカルタ旅行に招待したと言うことがありました。このときに、お金を入れた封筒が渡されたということが噂されていました。

- 2) このバンキナン会合の後に、村の社会指導者らが、県知事庁舎に呼ばれました。そこで、彼等は、「移転同意表明書」に署名しました。これに署名したのは、村長、ニニック・ママック、住民代表、村の名士(tokoh masyarakat)らです。彼らは、「住民代表」の資格で署名しました。もちろん、この人たちもスハルト政権下では政府に逆らうことができません。何度も申し上げますが、逆らえば逮捕されたり、いかなる暴力を受けるか分からないからです。政府に反抗すれば殺されるか、高額な利益で懐柔されるかのどちらかなのです。もちろん、名士だけの同意書ですから、村人全員が「移転同意書」に署名したのではないですし、そのような書面に村人個人がサインしたことはありません。

その後、財産目録作成チームが訪れて来ました。調査メンバーは、総勢6名でした。彼等は、およそ1時間半にわたって調査しました。しかし、その調査結果について確認

することは要求しませんでした。私はそれ故、「住民財産目録書」には署名していません。

それから半年ぐらい後に、私は村役場に呼び出されました。そこで、補償対象となる土地区画(persil)に関する4枚の書類を見せられ、それに署名するよう求められました。それに応じて、それぞれの書類に署名しました。署名したのはだいたい私の財産を反映していたからです。そのうちの2枚の書類は、控えとして持ち帰りました。しかし、これらの書類には、補償金額は記載されていませんでした。財産はだいたい正確でしたが補償金は全く低いものでしたからこの書類は何のために作成されたか分かりません。

補償金は、移転前、1990年頃から少しずつ払われるようになり、1993年ころまでには支払われました。金額は総額700万ルピアを受け取りました。これは、全く足りません。家のための補償金は500万ルピアでした。200万ルピアというのはトウガラシ畑とゴム園のことです。私たちは家は2000万ルピアでした。これは不当に安いもので大変間違った価格です。たとえば当時の相場では土地は1㎡で3500ルピアぐらいでしたが、政府は1000ルピアとしか計算していませんでした。ゴム園はゴム1本8000ルピアと計算していたのですが、政府は1本800ルピアとしか計算しませんでした。私のゴム園は月60万ルピアを稼いでいました。政府の買い取り価格は1年の収穫にも及びません。みかん園はいまでも補償されないまま残っています。最近も政府の役人にみかん園が補償されていないことを苦情を言いましたが、全く音沙汰がありません。

3) プロウガダン

移転の順序として、まず、プロウガダンが移転し、ムアラマハットが移転し、その後にタンジュン・アライが移転するという順序であると聞いていました。移転先の村の状態については、建物、土地が整備されている、ゴム園は移ったときに収穫できる、井戸などちゃんと作られると言うことでした。このときにも良い生活が政府によって約束されているという説明でした。

1992年8月31日にプロウガダン移転開始がありました。このときにたくさんの132隊が来ました。この軍隊の名称を知っているのは私が実際に現場を見に行ったから知っているのです。

当時、プロウガダンの移転先は整備されていませんでした。そのためプロウガダンの人々は移転をいやがっていたのです。軍隊がやってきたのはいやがるプロウガダンの人たちを無理矢理移転させるためです。このとき私はバイクで現場まで行き、国道から様子を見、さらに村の中にも入りました。国道の両側には軍人が軍服を着てだいたい1mから3mぐらいの距離をおいてずっと並んで立っていました。みな自動小銃を持ち、それを構えていました。軍隊に囲まれて村人のトラック移動していきました。まず家族を乗せてトラックが、次にその家の荷物を載せたトラックという順で家ごとに移動していきました。それは本当に気の毒な状態でした。たくさんの人は泣いていましたし、中には絶望して怒った顔をしていました。

村の中にも入りました。村の中にも兵隊がたくさんいました。中には自動小銃を持っている兵士もいました。混乱状態でした。みなただただ恐怖心からものを出して移る用意をしていました。私には遠い親戚がいますが、移るのは本当に大変だと言っていました。

た。いまだからはっきり言えますが、当時人々は兵隊のことをうらんでいました。もちろん当時はそんなことはとても口に出すことはできません。誰もがおそれて細かいことは怖がって言いませんでした。今は改革の後ですから、きっと言いたいことがいっぱいあるだろうと思います。私も今だからはなせることです。

プロウガダンのことは私にとっても村人にとってもショックなことでした。村の誰もがこわがりました。移転先が整っていないくても強制的に移転させられる考えました。私たちには移転するしかないとあきらめるしかありませんでした。このことは私たちだけではなく、外の村でも同じだったろうと思います。

プロウガダンの移転先は家も、ゴム園も、水も整備されていない状態でした。それでも政府は無理矢理村人を移転させたのです。私たちの移転先はプロウガダンの土地よりもずっと悪い状態だったのです。それでも私たちもプロウガダンと同じ運命になることを覚悟しなければならぬと感じました。

4) 移転

プロウガダンの移転の後ですが、1992年のころにタンジュン・アライの移転先の家屋が3軒ほど焼かれるという事件がありました。そのときに、私たちは火事が消えてから見に行きました。これが抗議の印であることはよく分かりませんが、村の誰もがその意味を分かっていました。家が焼けて無くなれば移転の必要が無くなるのです。このときに現場に行って、焼けていない家の様子を見て移転先の家というのがひどい状態であることがよくわかりました。どの家もセミパーマメントとはほど遠い木造の粗末な家で、約束と違うことがはっきりわかりました。家の周りは草が生い茂り入ることもできませんでした。ドアを開けることができるのですが、中に入ると泥がいっぱいたまっていました。木の家だったので、壁の床付近が下から腐っていました。

ゴム園も見に行きました。ゴム園は赤土がむき出しになっており、苗木すら植えていないことがわかりました。井戸もありましたが、外見は井戸でしたが、水が湧いておらず雨水をためるだけの状態でした。明らかに水が出ない状態で全くひどいものでした。政府は最初から約束など守る気はなかったのです。私たちは移転先が整備されようがまいが、補償されようがされまいが、無理矢理移転させるとというのが政府の考えだというのがはっきりわかっていたから、逆らうことはできることはありません。私たちが何が何でもただ受けるしかありませんでした。政府に逆らえば、逮捕されてしまうか、あるいは軍隊に殺されてしまうという恐怖がありました。

1994年10月4日にタンジュン・アライの313世帯の移動が行われました。プロウガダンのことがありましたから移転先がひどい状態でも私たちがなすべきことはわかっていた。私たちには選択肢はありませんでした。移動に軍隊は来ませんでした。このときには平穏に行わたのです。プロウガダンでの軍隊の効果があったのです。

3. 移転後の生活状況

1) 移転後の家

移転先の家は6 x 6mの木造家屋で、床はコンクリートが薄く覆ってあるだけでした。

政府が言っていたセミパーマメントハウスとはほど遠いものでした。しかも、移転したときには、私の割り当てられた家は草で覆われていて、扉もすぐには開きませんでした。雨水が侵入して家中の床が 50cm ほど泥で覆われていました。家の水回りが何も行われておらず、新しい道の泥が雨水と共に家に入ってきていたのです。壁には板でできていて泥がたまった部分は既に半分くらい腐っていて、壊れていて穴が空いており、しかもシラアリやられていました。掃除した後に分かったのですが、コンクリートの床はぶかぶかになっていました。家が使えませんが移転の日は、家具を入れることはできません。夜は中で寝ることができず、仮眠をとる程度でした。翌日、家の泥をかたづけ、なんとか生活できる程度にしました。当時、私の家族は妻、13 歳、11 歳、10 歳の子供の 5 人家族でした。子供は家の中で寝かせることができず、外でビニル製のシートを貼ってテントとし、そこで寝かせました。私と同じような家族はたくさんありました。

タンジュン・アライの移転先はひどい傾斜地だったので本来斜面を削って平らにした上で家を建てなければなりません。しかし、多くの家の床は斜めでした。私の家の床も傾いていました。ですから、家で寝るときには枕はいりません。上を頭に向ければ良いのです。私は自分で床を削って平らにしなければなりませんでした。移転先の建物はとても人の住む家ではありませんでした。

私は移転して、すぐに家の水回りを考えました。道路からの水が入ってこないようにしたのです。しかし、それができない家がたくさんありました。雨期になるとたくさんの家族が泣いていました。雨が降ると水があふれて家の中にいられないのです。

政府は私たちに対してまともな扱いをしませんでした。政府は私たちを人間とは見ていなかったと思います。

2) 飲料水

新しい、家では井戸が 4 世帯に 1 つありましたが、井戸から水は出ませんでした。井戸は浅く、水が出ませんでした。水がでるはずがないのです。みかけだけの井戸でした。そのため私の家族は 100m ぐらい先にある小川まで水をくみに行かなければなりませんでした。政府はもともと便所を用意していますが、そこはただ掘った穴に、その周囲をアスベストで囲んだだけのもので使い物にならない状態でした。水浴び、洗濯、トイレも全て近くの小川で行いました。

3) ゴム園

ゴム園は非常に遠く、家から 2.5km ぐらいの位置にあり、とても急な坂道で行くのに 1 時間ぐらいかかりました。急な坂であったことと道が整備されていなかったので歩いていかなければなりませんでした。雨が降れば道はどろだらけとなり、おまけにつるつる滑り歩くのも大変でした。それでも私はまだましなほうで村の人には 2 時間、3 時間とかけて遠くのゴム園に行かなければならない人もいました。

ゴム園予定地は木は切り倒されていましたが、1 本もゴムは植えられていませんでした。赤色の土が露出しているだけででした。しかも、ひどい傾斜地でした。何も植えられていないゴム園を前にして、どうすることもできない気持ちでした。しかし、私たちは政府に逆らうことはできません。私たちはただ呆然とした気持ちになるほかはありません。

んでした。

1997年頃になって、あまりのひどさと生活の困窮からゴム園に問題を感じる人たち17人が集まり郡政府に苦情を言いました。私もその1人です。その結果、政府から村の313世帯の全部に46万ルピアを植え付けのための補助金が出ました。このお金をもらってもゴム園をあきらめなければならない人もいました。それはゴム園が非常に遠かったり、急傾斜でとても植えることができなかつたりということがあったからです。私はその時の補助金で800本のゴムを買いました。このときのゴムは30%ぐらいは成功しました。もちろん、ゴムの植林、世話は46万ルピアでは足りませんでした。たとえば、この800本は1人で運べませんから人を雇わなければなりません、そのほかにもいろいろお金が必要だったのです。

4) パラウィジャ地

40m × 100mのパラウィジャ(畑)についても、平らな土地があるだけで何も植えられていませんでした。これは本来陸稲(gogo)を植える目的でしたが、全く植えることができる状態ではありませんでした。森林をはぎ取っただけで赤土がむき出しになり、やせたままの土地で、土地が陸稲に全く向いていないのです。政府から種を支給され、植えたのですが全部失敗しました。その後、陸稲をあきらめカレー、マンガス、ドゥク、ゴムを植えたり別のことに使っています。

5) インフラについて

タンジュン・アライは国道に沿っており、国道は舗装されていました。しかし、国道から村に入る道はできていませんでした。人が通ってから道ができました。村の中に草を刈った場所という意味で細く道らしきものがありました。私たちの村は外の村に比べても特にひどい状態だったように思います。こんな状態ですから、車が入れるのは国道沿いだけでした。移転の時、トラックから家具を家まで運ぶのが大変でした。すべてを抱え、急傾斜地を荷物を持って歩いて移動したのです。今でも、道路は整備されておらず、国道まで歩いて出ています。雨が降れば道が分からない状態になります。泥で足が取られます。

移転したときには電気は通っていませんでした。移転してから3年ぐらいしてからようやく電線が通るようになりました。結局政府の約束とは別に自分たちで引き込み料を払って、電気代も払わされました。

6) 私たちはこのようなひどい環境下に移転させられました。しかも、移った当初、私たちは収入を得る手段を奪われ、私も含めてみな失業状態でした。生活はたちどころに困りました。あらかじめ支払われた補償金はわずかで移転前に無くなりました。政府は移転当初に米、魚を支給しました。その米はひどいものでくさいにおいがしていました。それは本来ニワトリやアヒルが食べるようなものでした。魚は見たこともないほど腐っており、中にはウジ虫がわいていました。私たちは外に食べ物が無く、やむなくこれらを食べていました。ウジがわいている魚でもそれを取り除いて食べたこともあります。

4. 転居

- 1) 私はこうした状況下で 1 年半間がまんしていたのですが、1997 年ころ、下の方に平らなところがあって移転し、そこに自分で家を建てました。この土地は自分たちのグループが役人と交渉して、国道近くの平らな土地を提供させたのです。このときに平らな土地に 20 家族が移りました。

生活は苦しく、恐ろしくとも政府に対して何か要請しなければなりません。1999 年終わり頃、村の各グループの代表者 17 人でゴム園の整備を要請しにバンキナの知事アシスタントのオフィスに行きました。この中には私も含まれています。その結果かどうかは分かりませんが、2000 年になって政府はようやく第 1 回目の植林事業を行いました。がうまくいっていません。

私は生活は難しい状態です。ゴム園だけで生活できず、どうしたらいいか途方に暮れています。子供の学費の工面も大変です。電気代も時々滞っています。電気代が払えないときには違約金が科せられます。

- 2) 移転によって、村の絆も悪くなっています。ダム開発はまたミナンカバウののよき伝統が無くなるうとしています。私の属しているスクの連帯はありますが、それ以上の連帯はありません。ダム開発は悲劇そのものです。

以上